

た第2次産業には見るべきものがなく、わずかにある製造業は土産品製造が多く、観光業とのつながりが強い。全就業者数の58%を占める第3次産業においても、旅館・飲食店・土産品店・各観光施設や交通機関等、観光業にたずさわる人はかなりの数にのぼる。また、観光客が市内で消費する金額は大きく、観光業は市の経済基盤を支える産業となっている。

指宿温泉は、江戸時代から付近の農民を集める湯治場として栄えていたが、昭和28年観光ホテルの建設以来、摺ヶ浜地域を中心に旅館街が形成されていった。高度経済成長期には、国民生活の向上と余暇時間の増加に伴って、観光旅行が全国的に普及、浸透していった。この時期指宿では、観光施設の整備・宿泊施設の拡大を実施、観光地としてめざましい発展をとげた。

現在指宿では、観光客の志向の多様化・旅行範囲の広域化の影響を受けて、宿泊客の比重が低下してきている。旅行形態では、昭和40年代初期に多かった新婚客や修学旅行客が激減、かわって一般団体客が宿泊客の主流を占めている。しかし近年、全国的動向と同様に、家族・知人グループ等が増加、大規模団体による慰安旅行は減少している。宿泊客の発地は、近畿・関東など大都市圏が4割と多いが、九州内からの客が増加傾向にあり観光客全体では高い割合を占めると思われる。この状況を反映して、利用交通機関は自家用車が圧倒的である。旅行時期は、3月と8月にピークがあり、6月・12月は観光客が少ないが、全国的にみると、指宿地域は全年型に近い観光地といえる。

宿泊施設のうち大規模なものは、比較的新しく、既存の温泉街より離れて立地している。これらは

独自で付帯施設の充実に努め、旅行業者を通して広い市場から団体客を中心に安定した集客を行っている。一方中小旅館の多くは、古くから温泉街に立地、観光集落を形成してきたが、施設整備や宣伝の点で大規模ホテルに劣り、経営は苦しい。

観光客の流動状況では、鹿児島市や霧島、宮崎との結びつきが強く、福岡—長崎—熊本—大分の九州横断ルートとは別の、閉鎖的のルートを持つ。しかし、将来九州自動車道の完成によっては、福岡—熊本—南九州の縦断ルートを形成し、北部九州と結びつきを強める可能性もある。

昭和40年代急成長した指宿も、オイルショック、沖縄返還、海外旅行の大衆化、新幹線博多開業の影響をうけ、50年代に入ると新婚客をはじめとして観光客が激減した。それまで自然資源に頼り、人文資源の開拓やサービス向上に努めることなく、宿泊施設の量ばかり増大させた指宿の痛手は大きかった。地域住民の生活環境保護や、地元産業の育成に尽さなかったため、指宿の観光業は市民の真の理解と応援を受けられず、今日の停滞を招いたといえよう。

今後はそういった点を反省し、行政機関と観光関連産業、そして指宿の主役である市民が一丸となって、温泉保養観光都市を目指すべきであろう。

市当局等の努力により、幸いここ2～3年は、観光客数が増えつつある。この機会に、中小旅館をはじめとする人々は、他力本願的考えを捨て、少しずつでも工夫努力していくことが望まれる。そして地域住民にとって住みよい町づくりを考えていくことが、よりよい観光地形成と市の発展につながるといえよう。

秦野市における花き温室園芸の変遷と農業構造

古川京子

神奈川県秦野市は、現在もたばこの産地として知られているが、実際には戦後都市化の影響を受けて、地域の農業はかなり多様化している。花き温室園芸は、そうした多様化の中のひとつとして

起きたのであるが、戦後急速に成長し、一大産地となった。本稿の目的は、この花き温室園芸がどういった要因から、またどういった過程を経て一大産地となったのか、現在はどういう状況にある

のかなど、花き温室園芸という面から秦野市の性格を明らかにすることである。

秦野市の花き温室園芸は、戦後都市化により打撃を受けたたばこの代わりとして導入され、急速に成長した。なかでもカーネーションが主流となり、県下有数の産地となった。その要因としては、花き温室園芸がたばこ栽培よりも労力のかからないこと、導入当時はまだ花き栽培が全国的に普及していなかったため、大きな収益が見込まれたことなどがあるが、秦野市が京浜市場に比較的近い距離にあったという有利な立地条件も要因と考えられる。一般的に輸送園芸地域は、産地の中でも特に産地集中地域がみられるが、秦野市の場合は、転換作物ゆえに温室農家が市内に分散立地するという結果を生んだ。これに対しては、共同出荷体制をとって能率化をはかり、他産地に対抗した。

1970年代半ばの石油ショック以降は、秦野市のカーネーション生産が下降し、廃止やバラへの転作などが増えてきた。その原因としては、重油費増大のほか、カーネーションが全国的に作られ、生産過剰になってきたこと、交通手段の発達により他産地のものが京浜市場に進出し、地の利が生かせなくなったこと、労働力の高齢化などが考えられる。

そこでカーネーション栽培では、今後はより高品質なものを生産する必要がでてきた。バラ転作にしてもカーネーション栽培と比べて圧倒的に有利というわけにはいかず、重油費をいかに減らすかが今後の発展の鍵となっている。

一方、最近では温室鉢物栽培が少しずつ増加の傾向にある。これはカーネーションからの転作という形はほとんどなく、普通作からの転作が多い。鉢物の場合、消費地立地的性格を持ち、今後も発展する可能性が高い。

秦野市は、本町・東・南・北・大根・西・上の7地区から成っており、温室農家は各地区に分散立地してはいるものの、地区によって作目や品種に違いが見られた。とくに平塚市に隣接する大根地区は、バラの産地平塚市と土壌条件が近く、社会的影響も強く、バラ栽培が多い。また地形的に孤立している上地区は、もともとたばこ栽培が少なかったことなどから他地区とは事情が異なり、花き温室園芸はあまり普及されなかった。全体的に市街地に近い温室農家ほど小規模経営で温室規模縮小への意向が強く、比較的温室農家が集中している地域では、その地域全体で現状維持的傾向や縮小傾向を持つという特色が見られた。

今後は、鉢物栽培が発展し、バラ栽培はカーネーションからの転作が続き、カーネーション栽培は一部の農家によって担われるだろうという予測が立てられる。花き温室園芸でも後継者の問題は深刻であるが、後継者のいる農家では新しい技術や設備を導入する意欲が旺盛であり、暗い材料ばかりではない。将来は、後継者のいる農家や若い年齢層の農家によって、より機械化されて担われていくことだろう。

過疎化に伴う山村社会の変容

—愛媛県上浮穴郡美川村を例として—

松崎 美南子

1. 研究の目的と方法

高度経済成長期、山村から都市への人口流出が著しくなり、山村では村落機能がマヒする過疎問題が深刻化した。本論文は、愛媛県上浮穴郡美川村を例として、その過疎化の過程とその要因を明らかにするとともに、それに伴う村落社会の変容を把握することによって、山村の再生への道を探

ることを目的としている。まず、過疎の定義を明らかにし、四国山村の中における美川村の位置づけを行なった。(序論)次に、人口動態と就業・産業構造の変化から過疎化の過程をおうとともに、1部落の例をとりあげ、過疎化をもたらした要因を考察した。(第2章)また、第3章では農林業・土木事業の動向と過疎問題の社会的側面について